

本論文は、これまで包括的な研究を欠いていたセレウコス朝シリアのアンティオコス4世（在位前175年-164年）によるギリシア都市や聖域への奉獻政策に関して、美術史学、考古学、建築史学などの観点から研究し、それを通してヘレニズム時代の国際関係をも考察した大部の労作である。

このため、王による各種の奉獻事例の真偽を検証した上で、彼の奉獻政策全般を見渡すという手順を踏む。アテナイのオリンピエイオン、レバディアの山頂の未完ゼウス神殿については文献史料と考古学的遺構から、王による奉獻事例であると確認する一方で、従来は同王の関与の可能性が提唱されていたアテナイのパルテノン内部や神像台座の再建、オリンピアのゼウス神殿神像や西破風の修復、同神殿への絨毯の奉獻、同神像の等大コピーのダフネへの建造などについては、奉獻説を否定する。

また、アンティオコス4世はメガロポリスに城壁を、テゲアに劇場を奉獻したことが知られている。本論文では、両都市がアカイア同盟の重要な構成都市であるゆえに王からそうした奉獻を受けたことを指摘し、同盟の歴史の詳細な考察を行うことにより両奉獻の年代を前169/8年冬以降前164年以前と決定づけた。同時に、テゲアの劇場がフィロポイメンの像と顕彰碑文の横に奉獻されていることに着目し、王はこれによりギリシア世界の理解者、保護者、後継者としての姿を印象づけようとしたのであると論ずる。また、メガロポリスの城壁は、その欠如および脆弱さがギリシア世界に広く知られた同市の致命的な欠陥であったことを同市の歴史を辿り明らかにする。つまり、アンティオコス4世はこの懸案の課題を考慮して、同市に奉獻を行ったのであるとし、奉獻に際し、王は奉獻対象の事情を把握していたと主張する。

ミレトスのブーレウテリオンについては、とりわけ考古学的観点から考察を行い、これをギリシア建築史の中に位置づけた。これにより、ブーレウテリオンの職人のアッタロス朝造形文化圏との密接な関係が明らかとなるが、セレウコス朝とアッタロス朝は対立しても、造形言語のレベルでは両朝には緊密な関係があったとし、国際関係の多層文化構造を浮き彫りにする。また、ミレトスにブーレウテリオンを奉獻する王の意図は、セレウコス朝の威信発揚のためだけでなく、それがセレウコス朝、アッタロス朝、ミレトス、ローマの間の微妙な国際関係から生まれたことをみごとに論じた。

キリキア地方オルバのゼウス神殿はその造形的特徴から前2世紀前半から中頃の建造であるとして、アレクサンドリアの造形文化圏の影響が強いことを確認する。そして、奉獻者はアンティオコス4世で、同王がエジプトの職人を使って神殿を奉獻したと論ずる。

結論として、アンティオコス4世の奉獻政策が当時の国際関係を正確に把握した冷静かつ的確なものであり、王はギリシア世界を深く理解した有能な国際政治家であったことが明らかにされた。

膨大な文献・考古学的資料を用い、煩瑣な論文構成をとるため論旨に明快さを欠くきらいはあるが、本論文はヘレニズム時代の考古学、美術史に大きく貢献する内容を含んでおり、西洋の学界にも貢献する部分を有している。よって、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしい水準に達しているものと判断する。